

〔前回の復習〕

〔今回の授業のねらい〕

これまで、4回の日本人論の授業を通して、留学生の間には日本人理解がかなり浸透していることを前提に、日本人の心情を生み出している「日本人の文化」についても幾つかの例で触れ、日本人教員が担当する授業の最終章とする。

最後に、日本人すべてという語弊があるかも知れないが、昔から人々に好まれている、精神性の高い生き方を表した宮沢賢治の「雨にも負けず」と、他人との比較において悩む日本の若者に、自らの存在の価値を伝える金子みすずの「わたしと小鳥とすずと」を留学生に紹介する。

この5回の授業では、日本人や日本の社会について学び、考えることが、それぞれの人生にとってどのような意味を持つものかを、「留学生基礎力」として共に考えたい。

〔解説と授業の展開〕

1. 真名と仮名 — 文字とジェンダー

留学生のみならず、日本語を学習する外国人にとって、日本語が難しいと感じられるのは、表意文字である漢字（真名）と表音文字である仮名を併用する言語表記システムである。

学習における最大の動機が「興味付け」であるとするなら、真名と仮名の仕組みを歴史的に解説し、その中に潜むジェンダーの問題（つい数十年前まで、男女で使用する文字や文体の違いが残っていた）にまで言及して興味を喚起する。

2. 成仏する草木 — 日本の自然観

世界中を席卷している日本アニメの源流の一つはどこにあるのか。あらゆる生物・無生物に靈魂の存在を見出すアニミズムは、世界中に見られる現象である。しかし、それが近代化と世俗化の極度に進行した社会で、いまだに人々の発想を規定している点に、日本社会の大きな特色がある。

古くは仏教に由来し、森羅万象に靈魂の働きを見出し、草木までもが成仏するという思想は、現代においては無生物、人間が使用する物、人間が生み出したキャラクターにまで及んでいる。

3. ワビ・サビと日光東照宮 — ウラの美学とオモテの美学

異文化理解は、価値観の違いを理解することであることを、これまでも述べてきたが、日本人の価値観、ウラ＝ホンネとオモテ＝タテマエには美意識が深く関わっている。

日本の美意識や季節感は京都中心であるが、京都のタテマエにはウラとしてのホンネがあり、世界の大勢としてのオモテの美学とは異なる。日本人は、世界の中では特殊な京都の美学を自然なものとして受け入れている場合が多く、分かりにくい価値観となっている。

しかし、オモテの美学に慣れすぎた外国人（よくある日本通）にとっては、京都におけるウラの美学は大変新鮮なものであり、豪華絢爛たる日光東照宮のような建築は、美意識的に評価が低くなるようだ。

4. 花より団子 — 名を取るか実を取るか

「京の着倒れ」は、着物の裏地・八掛け（裾回り）の「見せずに見せる」所作や、聞き手中心のようでは実は微妙に話す自己主張であり、気配り文化である。

「大阪の食い倒れ」は、食べるという肉体的快楽から来る、直裁的な自己主張をする直言文化である。

留学生にとっては、京都人の婉言的な表現よりは、大阪のおばちゃんの直言文化の方がはるかにわかりやすい。しかし、この「京都の着倒れ」に見られる婉言文化が理解できないと、日本人理解は難しい。

5. 日本人の好きな詩2編

雨にも負けず

雨にも負けず 風にも負けず
雪にも夏の暑さにも負けぬ 丈夫なからだをもち
慾はなく 決して怒らず いつも静かに笑っている
一日に玄米四合と 味噌と少しの野菜を食べ
あらゆることを 自分を勘定に入れずに
よく見聞きし分かり そして忘れず
野原の松の林の陰の 小さな萱ぶきの小屋にいて
東に病気の子供あれば 行って看病してやり
西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を負い
南に死にそうな人あれば 行ってこわがらなくてもいいといい
北に喧嘩や訴訟があれば つまらないからやめろといい
日照りの時は涙を流し 寒さの夏はおろおろ歩き
みんなにでくのぼーと呼ばれ
褒められもせず 苦にもされず
そういうものに わたしは なりたい

【宮沢賢治】

宮沢賢治
[1896-1933]

作家。農業技術指導、レコードコンサートの開催などの活動をし、農民の生活向上を目指す。「銀河鉄道の夜」「注文の多い料理店」「風の又三郎」などの著書がある。

わたしと小鳥とすずと

わたしが両手をひろげても、
お空はちっともとべないが、
とべる小鳥はわたしのよう
地面（じべた）をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのよう
たくさんのうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。

金子みすず [1903-1929] の詩。

6. 日本や日本人について学ぶということ

日本人や日本の社会について考えることは、自分の国、自分の育った社会について考えること。
将来、日本の社会で暮らし、日本人と一緒に仕事をするためには、このこと
の理解が必要。
また、このことを通して、自分のあり方や自分の人格について考えることにも繋がる。

【授業のまとめ】

【参考文献】

- ・ 日本文化論キーワード（2009年 有斐閣双書）
- ・ 詩2編は、インターネットから検索

【レジュメ】

添付

【配布プリント】

添付

「日本人の文化」レジュメ

〔前回の復習〕

〔本日の授業内容〕

1. 真名と仮名 — 文字とジェンダー
2. 成仏する草木 — 日本的自然観
3. ワビ・サビと日光東照宮 — ウラの美学とオモテの美学
4. 花より団子 — 名を取るか実を取るか
5. 日本人の好きな詩2編

雨にも負けず

雨にも負けず 風にも負けず

雪にも夏の暑さにも負けぬ 丈夫なからだをもち

慾はなく 決して怒らず いつも静かに笑っている

一日に玄米四合と 味噌と少しの野菜を食べ

あらゆることを 自分を勘定に入れずに

よく見聞きし分かり そして忘れず

野原の松の林の陰の 小さな萱ぶきの小屋にいて

東に病気の子供あれば 行って看病してやり

西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を負い

南に死にそうな人あれば 行ってこわがらなくてもいいといい

北に喧嘩や訴訟があれば つまらないからやめろといい

日照りの時は涙を流し 寒さの夏はおろおろ歩き

みんなにでくのぼーと呼ばれ

褒められもせず 苦にもされず

そういうものに わたしは なりたい

【宮沢賢治】

宮沢賢治

[1896-1933]

作家。農業技術指導、レコードコンサートの開催などの活動をし、農民の生活向上を目指す。「銀河鉄道之夜」「注文の多い料理店」「風の又三郎」などの著書がある。

わたしと小鳥とすずと

わたしが両手をひろげても、
お空はちっともとべないが、
とべる小鳥はわたしのよう
地面（じべた）をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのよう
たくさんのうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。

金子みすず [1903-1929] の詩。

6. 日本や日本人について学ぶということは

【授業のまとめ】

真名と仮名

漢字とは漢民族によって作られ使用されてきた文字をいい、わが国で中国伝来の文字を呼ぶ場合の名称。
中国の周の時代には文字のことを「名」といった。日本語の表記のため漢字本来の意味とは関係なく便宜上、音や訓を借りて表記する文字を仮の文字という意で「仮名」といい、仮名に対して正式な文字とされた漢字を「真名」といって区別した。

【片仮名】

万葉仮名(まだ現在のよう「かな」がなかった時代で、漢字の音訓を借りて全部漢字で記されている)が盛んに用いられるようになると、漢字を読む場合、その読み方を漢字の横に万葉仮名を書き入れて示すようになった。その万葉仮名も漢字の全形では点画が多いので書くのに時間がかかる。そこで点画を省略した形のものを用いられるようになった…

【万葉仮名の草略化】

漢字の全形の万葉仮名は、書く場合楷書や行書体で書くので、手間がかかり面倒。読む場合も全部漢字で書かれているので、意味を表す表意的用法で記されたものか仮名的用法である表音的用法で用いられたものかを判断しながら読むのは非常に読みづらく不便なものだった。

【草仮名と平仮名】

安時代の初めに万葉仮名の草書体「草の手」を更に簡略化したものが出来「草仮名」といった。それを更にもっと極度に簡略化されたものが「平仮名」。

成仏する草木

仏語。心をもたない草木でも、仏性を具えていて成仏すること。天台宗・真言宗で説く。「草木成仏」。

【天台宗】

比叡山で修行を続けていた最澄は、中国に渡り、禅の教えを受け、帰国前には越州龍興寺で順暁阿闍梨から密教の伝法を受けた。多くの経典や法具を携えて帰国。
帰国した最澄は、『法華経』に基づいた「すべての人が仏に成れる」という天台の教えを日本に広めるために、天台法華円宗の設立許可を願う。その際、「一つの網の目では鳥をとることができないように、一つ、二つの宗派では、普く人々を救うことはできない。」という最澄の考えが受け容れられ、延暦25年、華嚴宗・律宗・三論宗(成実宗含む)・法相宗(俱舎宗含む)に天台宗を加えて十二名の年分度者が許され天台宗が公認された。

【真言宗】

真言宗は、弘法大師空海が平安時代初期に大成した真言密教の教えを教義とする教団。真言密教の「真言」とは、仏の真実の「ことば」を意味しているが、この「ことば」は、人間の言語活動では表現できない、この世界やさまざまな事象の深い意味、すなわち隠された秘密の意味を明らかにしている。弘法大師は、この隠された深い意味こそ真実の意味であり、それを知ることのできる教えこそが「密教」であると述べている。それに対して、世界や現象の表面にあらわれている意味を真実と理解している教えを「顕教(けんぎょう)」と呼ぶ。「顕教」とは、声聞(しょうもん)・縁覚(えんがく)の教え(二乗)と法相宗、三論宗さらに天台宗、華嚴宗などの大乘仏教を指す。

ワビ・サビと日光東照宮

日光東照宮

< 掲示資料 (例) >



日光東照宮

元和(げんな)3年(1617)徳川初代将軍徳川家康公を御祭神におまつりした神社。
 宮号宣下(くうごうせんげ)家康公は、元和2年4月17日駿府城(静岡県静岡市)で75歳の生涯を終えられ、御遺言により、一年後の元和3年4月15日、久能山より現在の地に移されおまつりされた。正遷宮は、同年4月17日二代将軍秀忠公をはじめ公武参列のもと厳粛に行われ、ここに東照社として鎮座した。その後正保(しょうほ)2年(1645)宮号を關り、東照宮と呼ばれるようになった。
 尚、現在のおもな社殿群は、三代将軍家光公によって、寛永(かんえい)13年(1636)に造替されたもの。

ウラとオモテ

三猿

< 掲示資料 (例) >



社殿に見える動物

日光東照宮を訪ねると様々な建物に多様な動物を見ることができる。これらの動物のほとんどは平和を象徴するものとして描かれている。
 奥社入口を護る「眠り猫」は、前足をしっかりと踏ん張っている事から、実は家康を護るために寝ていると見せ掛け、いつでも飛びかかれる姿勢をしているともいわれているが、もう一つの教えとして(裏で雀が舞っていても)「猫も寝るほどの平和」を表しているのである。
 神厩舎には猿の彫刻を施した8枚の浮彫画面があり、猿が馬を守護する動物だという伝承から用いられている。この8枚で猿の一生が描かれており、ひいては人間の平和な一生の過ごし方を説いたものとなっている。日光の彫像の中で眠り猫に続いて良く知られている、「見ざる、言わざる、聞かざる」で有名な3匹の猿はこの神厩舎に造られたものの1枚に過ぎない。なお、「見ざる、言わざる、聞かざる」は幼少期には悪事を見ない、言わない、聞かない方がいいという教えである。

花より団子

「花より団子」見て美しいものより、実際に役立つほうがよいこと。

【同類のことわざ】

- 花の下より鼻の下
- 色気より食い気
- 名を取るより実を取れ
- 思し召しより米の飯
- 酒なくて何の己が桜かな

